

名の見えぬことからすれば（巻四―五六七左注）、この時すでに亡くなっていたことが考えられるのであって、宿奈麻呂の死は神龜五年から天平二年六月までの二年近くの間に絞られる。稻公は坂上郎女の同母弟、旅人には異母弟にあたる。胡麻呂はさきの左注に「姪」とあり甥である。旅人の兄弟の子であるとすれば父は宿奈麻呂とする蓋然性も高い。それゆえに招かれたとも考えられるのである。

ここに冒頭に掲げた旅人の文章が想起されるのは自然であろう。妻の死という大きなショックのほかに一族中でもっとも頼りとなるべき宿奈麻呂の死をここに据えて見る時、続く、「永懷三崩心之悲」  
独流斷腸之泣」の悲痛な文辭と

世の中は空しきものと知る時しいよよますます悲しかりけり

（巻五―七九三）

と歌う旅人のうつろなさびしさをもっとも的確に理解しうるのではないかと思う。その死はおそらく旅人の妻の死と前後していたものごとく、從四位上、右大弁就任後ほどなく亡くなったがゆえに經紀に記載されることもなかったのではなからうか。

坂上郎女が神龜五年か天平元年に大宰府の兄の許に下ったこと理由は従来さまざまに考えられてきていて、それぞれに傾聴すべき要素はあろうが、私はその大きな理由の一つとして、やはり宿奈麻呂の死ということを考えたいと思う。これまでの下向理由の大方は旅人側の都合にあり、妻大伴郎女亡き後の大伴家の最高巫女、家刀自などの座の補充、旅人や家持の世話のためとかいわれているが、巫女的あるいは家刀自としての立場の歌は大宰府滞在期間中に見ることができず、家持らの世話ということも、自分にも二人の幼子のあることを思えば大きな理由にはなるまい。まして宿奈麻呂が生存

していたとすれば、たとい大伴郎女が亡くなったとしてもこの下向はありえないことであろうから、これらの理由はいずれも付会に過ぎず、もし何らかの立場があったとしても決定的なものではなく付加的なものであろう。

私見はきわめて世俗的・通俗的に見ようとするのだが、お互いにつれあいを亡くしてヤモメになった異母兄妹がそのさびしさを慰め合うためにも、一つ屋根の下に起居を共にして心の支えとなり合うという素朴な願いが双方にあったのではないか、少くともそれが下向の理由の大きな一つであったのではないかと考えるのである。

## 詩と音楽と

——詩はへうたうべきものか——

鈴木 亨

本学園の校歌の作詞者である大和田建樹（一八六七・安政四―一九一〇・明治四三）は、愛媛県宇和島のひと。和・漢の学を藩校で修め、次いで広島外国語学校で学ぶと、明治十二年（二十三歳）に上京、以後詩・歌・国文を独習して、女子師範や明治女学校、また立教・跡見などの女学校で教鞭をとった。彼は大町桂月・塩井雨江・武島羽衣ら当時の東大系の国文学者に対し、独学による、在野の啓蒙的国文学者として盛名をはせる一方、歌人、あるいは新体詩の詩人としても聞かえた。世間的には、例の「鉄道唱歌」の作者として、その名は今日においてもよく知られている。

この大和田建樹は、たゞん最初の近代文学史の筆者であろう。彼は明治二十七年に、『明治文学史』という書物を博文館から刊行している。——明治二十七年といえ、高山樗牛の「滝口入道」(四月)が読売新聞に連載され、その途中で北村透谷が自殺し、次いで日清戦争がはじまるといった時分である。

彼はその『明治文学史』を、福沢諭吉から説きおこし、(新聞)時代の到来を告げる文章で結んでいるが、私はここでその中の(詩)について触れている箇所をめぐって、少しく書いてみたい。

それによると、彼は詩(新体詩)と唱歌とを同じ文学の次元で扱っている。そして両者を詩歌改良運動の産物と見、それぞれの作例の先鞭をつけたのが、明治十五年の『新体詩抄』、同十四年の『小学唱歌集』であるとする。「前者は謂はゆるポエムを起さんとするものにて用語は通俗平易を主とし、後者は謂はゆるソングの手法にて語氣往々古調死格に傾けり。」というわけで、(詩)の将来の発展は、そうした両者の協調にまつべきであろう。両者は今のところ「永炭趣を異に」しているが、「物の左に曲れるを矯めんとすれば、先づ之を右に傾けざるべからず。」だ。つまり『新体詩抄』系の「通俗的な」ポエムは、『小学唱歌』系の「優美流調以て吟ずべく以て歌ふべき」ソングによって補正される必要がある、と論評しているのである。

彼はまた、ソングの源流を福沢諭吉の『世界国尽』(明治二年)とみる。『世界国尽』は同じ福沢による『西洋事情』(明治三年)の、童幼向け普及版だ。「世界ハ広シ万国ハ、多シトイヘド大凡ソ、五ツニ分ケシ名目ハ、亜細亞、アフリカ、<sup>アフリカ</sup>歐羅巴、……」とうたいはじめ、以下すべて七五調により、延々と八千余字を連ねて世界の

風土・文物・歴史を紹介していく。建樹はこの書について、次のようにしている。「世界の地理と歴史とは平易流暢の日本文字もて書かれたり。趣味ある馬琴調の七五体は新輸入の事実を記すに用いられたり。児童豈喜んで之を口に誦し、節を付けて吟ぜざるを御んや。此書一たび出でてより到るところの学校に往來に、『世界はアひろオしばアニコオクは』と歌ふ声を聞くに至りしなり。是れ彼う殺伐なる詩吟の口調を変じて、未来の唱歌軍歌を喚起するの伏線と為りしものと謂はんも敢て誣言にはあらざるべし。」

『世界国尽』が、キリスト教の讚美歌、及び小学唱歌とともに、新体詩の源流をなすものとする説は、もう広く行なわれている。それはソングの源流のみならず、ポエムのそれでもあった。小室屈山の新体詩「自由の歌」(明治十五年)の中に、『世界国尽』中のアメリカの独立戦争を説くくだりが、そっくりともいえるかっこうで取り込まれているのなどは、その顕著な事例である。

ところで、詩と唱歌とを同一次元で考えたのは、大和田建樹だけではない。それはむしろ、当時の世間一般の風潮だったのである。つまり、詩はへうたうべきものとする風潮は、幕末の詩吟の慣習から尾を引き、しかも存外に長く継続したというのが実情である。全国津々浦々の児童によって愛唱されたという『世界国尽』の節まわしは、もう不明だ。先年慶応義塾の百年祭の折、それを復元しようとしてついに成らなかつたという。建樹によれば、それは「かまくウラアだんじありイ」という口調、——即ち当時の若い陸軍軍隊楽手(のち戸山学校軍隊隊長)永井建子の作詞・作曲による軍歌の名作「冠寇」(明治二十五年)の調べに酷似していたらしい。たゞん鼓笛楽の節奏に乗るような、勇壮なものだったのであろう。

そのようにもはや失なわれてしまった曲は、少なくあるまい。が、逆に現存する曲も、かなりある。著名なものとしては、落合直文の「孝女白菊の歌」（明治二十一年）、「騎馬旅行へポーランド懐古」（同二十六年）、与謝野鉄幹の「人を恋ふる歌」（同三十年）、土井晩翠の「星華秋風六大原」（同三十一年）など。これらの曲は、すべて自然発生のもので、むろん作曲者はわからない。

島崎藤村は、その詩の多くを節づけしながら作ったであろう。『落梅集』（明治三十四年）の中には、シュネーベルトの「うみべといへるしらべに合せてつくりしうた」という詞書のある「海辺の曲」という詩があり、楽譜まで添えられている。なお、節づけしないまでも、詩を朗吟したちいう事例にも、こと欠かない。蒲原有明は「創始期の詩壇」（明治四十年）という文章で、少年時に姉と競って、口拍子に乗せながら「新体詩抄」中の詩を暗誦し合つたと伝えている（その文章によると、屈山の「自由の歌」には曲がついていたらしい）。宇野浩二の評伝「芥川龍之介」（昭和二十八年）の中には、仏文学者の辰野隆博士が、藤田泣菫の「公孫樹下にたちて」（二十五弦）明治三十八年）の詩を朗吟しだすと、久保田万太郎がそれを追って、やがて二人の合唱となり、筆者の宇野が涙を流さなければかりに感激して聞き惚れる場面があるという（松村緑『薄田泣菫』昭和三十二年）。大正末期ころのことであろうか。

北原白秋が昭和十二年に吹き込んだ「邪宗門秘曲」（『邪宗門』明治四十二年）「断章」（『思ひ出』同四十四年）などの自作朗誦のレコードを聞くと、それは朗吟というよりは、声楽である。宮沢賢治においても同断で、弟の清六氏の伝える賢治の朗誦法は、やはり朗誦・声楽にちかい。また賢治自身が、自作につけた曲譜もいくつか

残っているくらいである。そして賢治の紹介者の草野心平も、まぎれもない朗誦派だ。

近代詩と音楽は、このように相互依存の關係を当初から保ちながら最近に至った。が、今日では、詩に音楽を介在させようとする試みは、おおむねタブーである。

「詩と詩論」（昭和三十八年）を中心とするモダニズム詩の運動は、詩からへ音楽」とへ意味」とを追放することに躍起となった。その結果、詩は見た目の近代性を獲得したものの、ナンセンスなものになったというそしりはまぬがれえまい。戦後詩壇の主流も、モダニズム詩であるが、荒地派の努力によって、そこにへ意味」は回復された。しかし、へ音楽」の問題については、まだ手つかずである。

ただ最近、アングラ劇場などで詩の朗誦が行なわれはじめていて、その方面に触手が動きだしているふうであるが、私はその実情にくらいので、何とも甲しかねる。

いずれにしても、大和田建樹が明治二十七年に指摘した詩と音楽の協調という課題は、ニユアンスこそ違え、現在にまで持ち込まれているようだ。そしてこの課題を解決しない限り、詩が国民文学たる資格をになうことはできまいと私には思える。

とはいえ、私は現代詩を節づけしてうたおうなどと夢想しているわけではない。そこに復活できるのは、せいぜいへ内在律」どまりの音楽性であろう。ともあれ、まるまる音楽と絶縁したら、詩は散文になってしまふ。何らかの音楽に節奏され、公然たる場所での朗誦に詩が耐えられるようになることを願っても、やはりいたずらな夢想と一笑に付されるほかないのであろうか。でも私は詩の朗誦を、地下室の暗やみで聞く気には、とてもなれそうにない。